

の起源と関連して議論されてきた一方、初期曲鼻猿類のアダピス類と近縁であるという意見もある。始新世化石霊長類は主に歯顎の形態特徴から研究されているが、本研究では、アンフィピテクス科の系統的な位置の決定に四肢骨形態が有効であるかどうかを検討した。

アンフィピテクス科の四肢骨については、上腕骨と踵骨の標本が見つまっている。上腕骨 26 形質と踵骨 8 形質についての形態を、古第三紀化石種・現生種の間で比較した。サンプルにはキツネザル上科、アダピス上科、オモミス上科、メガネザル、初期真猿類、エジプトピテクス、広鼻猿類が含まれる。アンフィピテクス科の形質状態の系統的な意義を既存の系統仮説(初期真猿類、アダピス上科ノタルクトゥス亜科、アダピス上科の基幹)に対して、系統解析プログラム MacClade を用いて評価した。

各形質では収斂が頻繁に起こり、またアンフィピテクス科の形態の多くは現代型霊長類の中で原始的である。真猿類あるいは直鼻猿類との共有派生形質と考えられるものの方が、アダピス上科とのものより、多い。アンフィピテクス科とアダピス上科の四肢骨形態の類似は、両者の近縁性を支持するとされていたが、この研究からは、アダピス上科との類似はむしろ原始的と解釈されるべきで、直鼻猿類との系統的近縁性の方が支持された。

施設 19

チンパンジーの事物認識と社会的認識の発達

小椋たみ子 (神戸大・文)

Piaget がヒト乳児で明らかにした感覚運動知能の手段—目的関係の理解と対象関係把握シエマ(事物操作)について成体 3 個体 (パン, クロエ, アイ) と子ども 3 個体 (パル, クレオ, アユム) について 3 か月間隔で検査した。

1. 目的達成のために既に環境に準備されている手段の使用は子どもは観察開始の 2 歳前後にすでに獲得していた。
2. 目的達成のための手段の使用は、成体は常にではないが予見により成功した。子どもは、パルは 3 歳少し前に予見で成功したが、クレオ(3 歳 8 ヶ月)、アユム (3 歳 9 ヶ月) は筒の中の対象物を棒で出す課題で予見での成功に至っていない。
アイは手での解決を行い、他個体は口での解決が多かった。
3. 予見課題の「穴のつまった積木を棒へさす前に気がついて、いれない課題」はクロエだけが成功した。
4. 事物操作についてはブラシや電話の慣用操作をクロエが行なった。物のみたて行動はチンパンジーでは困難であった。

クロエが予見課題や事物操作でヒトが意図した課題の意味をよみとり成功したことは、彼の社会的認識能力の高さと関係していると考えられる。社会的認識能力とシンボル機能、予見能力の関係の分析は今後の課題である。

研究の一部は第 66 回日本心理学会で「チンパンジーの予見による手段—目的課題解決」で報告予定である。

施設 20

チンパンジー乳児における自己の名前概念の獲得と自己認知

魚住みどり (慶応義塾大・社会)

チンパンジー乳児が音声刺激としての自己の名前をどのように獲得していくかを縦断的に検討した。対象は京都大学霊長類研究所において 2000 年に生まれたチンパンジー乳児 3 個体。屋外放飼場で